■ 当面のドル／円とクロス円の下値は限られる！？

今週の週初から昨日（１７日）までドル／円は３日続落。やはり、新型コロナウイルス感染拡大の第２波に対して、市場が一層警戒を強めていることが大きい。なにしろ、今週１６日にはテキサス州やネバダ州など米国内の６州で新規感染者の増加が過去最高となり、昨日はオクラホマ州での増加が過去最高を記録した。さらに、中国では北京の感染拡大が警戒レベルを引き上げる段階に達しており、市場のリスク選好ムードはジワリ後退している。

足下では米・日株価の上値も徐々に重くなってきており、そのこともドル／円、クロス円の上値を重くしている。とはいえ、市場では感染拡大第２波への警戒が徐々に強まる一方で、依然として世界景気の急回復に対する期待も根強くあり、ときとして景気回復を裏付ける経済指標や景気データが米・日株価やドル／円、クロス円の下値を支える格好となるケースも少なくない。

その実、今週１６日に発表された５月の米小売売上高は前月比＋１７．７％と過去最大の改善を示し、同日の米株価は大きく押し上げられた。本日（１８日）付の日本経済新聞（朝刊）においても「米中『リベンジ消費』」の大見出しで、コロナ禍によって落ち込んだ米国や中国の個人消費が自粛からの反動による「リベンジ」で急反転している様子が伝えられている。

補助金や値下げに支えられている側面もないではないが、今後も米中をはじめとする各国景気の回復基調が持続すれば当然、世界の株価にとっても強気材料となり、同時に豪ドル／円をはじめとするクロス円とドル／円の下値も支えられることとなろう。

なお、テクニカル的観点からアプローチすると、目下の豪ドル／円と日経平均株価はともに一目均衡表（日足）の「基準線」に下値を支えられていることがわかる（下図参照）。言うまでもないが、基準線（日足）というのは過去２６日間のレンジの中心であり、文字どおり「相場の基準」である。

豪ドル／円にあっては５月半ば頃や同月初旬頃にも基準線が下値をサポートした“実績”があり、やはり節目としての重要度は非常に高い。現時点では、転換線が基準線よりも上方にあることや、現在値が日足「雲」の上方に位置していることなどから考えて、基本的には強気の局面にあると見ていいだろう

まったく同じことは、下段に見る日経平均株価の日足チャートにおいても言える。豪ドル／円との正の相関が非常に強いということは、過去にも本欄で幾度か確認しているが、最近はより一層相関が強まっているように感じられる。

一方のドル／円も基本的には豪ドル／円や日経平均株価との正の相関が強い。ただ、足下はドル買いと円買いが同時進行するなかで、やや円買いの方が強くなっている模様。目下は日足「雲」の中に潜り込む格好となっており、この「雲」下限が当座の下値の目安となろう。下値は限られると見て、ひとたび切り返してくれば再び基準線の水準を取り戻すと見ておきたい。

（０６月１８日　１０：５５）